

重要文化財指定を受けて思うこと

大阪芸術大学教授 山形政昭

思い起こすと、ヴォーリズの建築に関心をもち始めたのは1975年のこと、それから間もなくして神戸女学院を訪れた覚えがあります。正門は格調高くかつ親しみよいデザインですが、向かう先は緑に閉ざされていてキャンパスの様子を窺うことが出来ません、いわば関門です。この正門を潜らなければヴォーリズ建築の研究をこれほど続けることにはならなかったと思います。

今回の重要文化財指定はヴォーリズの建築で初めてのことであり、昭和の学校建築においても未だ事例の少ない画期的なものでした。ヴォーリズ建築での最初の文化財は近江八幡の一柳記念館(旧ヴォーリズ住宅)で20年ほど前に県指定文化財となっています。その後、大阪教会はじめ、残りの良い種々の建物が登録文化財とされてきましたが、国の重文は少々格が違う？といつてよいと思います。近代建築における重要文化財は、やはり明治建築、そして大正建築で昭和は多くありません。関西では大阪の綿業会館(1931年)くらいでしょうか。

ヴォーリズの建築は住宅と学校建築が多いのが特色です。共に生活に関連深い建物で、それが親近感を生む背景かもしれません。学校建築では1912年の関西学院神学館を初めとして明治学院礼拝堂、宮城学院、西南学院、九州学院などなど1937年の豊郷小学校まで、25年間に30余りの建築を残しています。とりわけミッションスクールが多く、建築界ではその覇者と言われています。神戸女学院の建築はヴォーリズの学校建築作品の集大成といえるものですが、よく知られる名作に、近くの関西学院があります。1929年に竣工したキャンパスは米国の伝統といわれる広大な芝生の広場をもち、そこに南欧風のスパニッシュ

・ミッション・スタイルの建築を配置したものでした。赤瓦屋根のミッション・スタイルとキャンパス・グリーンの対比、シンボリックな図書館の建築、……このキャンパスの特色が、関学に続いて着手された神戸女学院の設計へと引き継がれているところがありますが、相当異なるものとなっていることが分かります。1929年より1933年に至る5年間に建てられた、関連深い建築には1931年の横浜共立学園の建物、1933年の活水学院礼拝堂、東洋英和女学院があり、大丸デパートも1933年ですから、ヴォーリズの建築の名作が次々に生まれた最盛期でありました。その時期を通して取り組まれた大作が神戸女学院だといえます。いうまでもなくヴォーリズの力量に加えて、女学院から期待された精神、そして潤沢な資金等々、天から与えられた幸運に導かれた成果と言えるかもしれません。

……1例として図書館の建築を見てみましょう。

アーチの窓と赤瓦屋根を特色とするスパニッシュ・ミッション・スタイルですが玄関回りにはクラシックな列柱や飾り手摺が付いており、古典様式が入った実は複雑な面があります。とはいえ全体に穏やかで調和と風格のある建築です。その理由には美しいプロポーションと諧調、素材の持ち味、例えば複雑な色合いの瓦屋根、陰影を宿すスクラッチタイルやクリーミーなスタッコ壁などよく吟味された仕上がりにあるかもしれません。2階に設けられた閲覧室は美しさにおいて著名な空間となっている通りで、改めて話すことは控えますが、北向きの窓から入る穏やかな光、6メートルを超える高い天井、長大で見事な読書机など、読書のための空間が追及されたところです。ミッション建築の構成を踏まえながら機能性、と快適性を求めたところで「古典型を選択し、これに近代的改善を施せるもの」というヴォーリズの設計手法が大変良く理解できる空間と言えます。

文学館の建築は大きな「家形」の親しみよい建築です。これは神戸学舎の「南舎」の建築を引くものと言われていますが、ヴォーリズらしい表現が込められていると考えています。

つまり大きな寄宿舍のようで、住居的な外観であり、ここにヴォーリズが信

条としたピューリタニズムの生活思想が表れているように思っています。ピューリタニズムに求められる生活には、次の3つが要点と言われます。つまり、Healthy(健康)、Simplicity(簡素さ)、そして Rational(合理性)であり、それらが整った環境の良さを Domesticity(居住性)といいます。健康というのは身体だけではなく精神的な健全をさしています。

教室内を見てみましょう。明るい窓とシンプルですがよく吟味された内装で、決して贅沢なものではなく良質で居住性の良い空間といえます。

神戸女学院といえば外観など華やかなところが注目されますが、実はこうした居住性の良さが大きな特色であるといえます。

それぞれの建物にもっと触れたいところですが、思い切って省略し、樹木と庭園について述べたいと思います。このキャンパスはかつて尼崎藩の御林山で、かつての藩主桜井家の別邸跡という由緒ある自然を伝えています。実際、別邸時代の庭園の一部が残されており、樹木にもイロハ楓など和種が多いようです。音楽館前の広場にある刈り込まれた黒松群が特に見事だと思っています。つまり当時の建物と共に歴史のある樹木、緑の環境をよく保持していることに気づきました。

次の写真は創建時代の中庭全景と同じアングルの今の中庭です。創建直後のように中庭中央の池はまだ出来ていないことが分かります。そして芝生も植え込み直後のようですが、図書館前の木々は昔からあった樹木で、センダンの大木など今に伝わっています。建築は勿論変わっていない、そうではなくて文学館の屋根は太平洋戦争で焼失、復興、さらに兵庫の震災で崩落した後、再度修復されてきたものです。非常な努力によって変わることなく維持されてきたことが分かります。ヴォーリズの建築も名作ですが、この地に伝わる緑の環境と共に生きる歴史のあるキャンパス・スケープとして類例を見ない貴重さがあると感じます。

まとめとなりますが、このキャンパスについて30年前の1984年に、文学部教授でおられた渡辺久雄先生が書かれた「ヴォーリズ博士と竹中藤右衛門氏」(1984年発行『学院史料』第2号所収)という次の文章の中で、このことについて



中庭の眺め（本学提供）



移転当時の中庭（本学提供）

述べられています。

「設計者としてのヴォーリズ博士が、いかに優れた構想のもとに、この見事な神戸女学院の建物を設計したかは、半世紀を経た今日、この建物を眺めたとき、しみじみと感ぜられる。建物配置が示す自然景観への優れた調和といい、建物の一つ一つから滲み出る個性の素晴らしさ、内装における細やかな配慮が示す教育的効果の大きさなど、どれ一つをとってみても、五〇年前の構想とは考えにくい程に現在的なので

ある。」

文章が書かれたこの時より30年、つまり創建より80余年を経た今も正門からのアプローチ、中庭の環境、グラウンドからの眺めなど、変わらずあることに驚きます。

ヴォーリズは建築への動機として「神の国」の建設、という言葉を使っています。つまり「理想的な環境を、現実の日常生活において実現させる実験」であったと解せます。「神の国」を目指す意志と使命感(ヴォーリズの言うキリスト教主義)に導かれて神戸女学院の建築ができ、それが現実的に営まれる。そういう実験が成功しているということを思うと、この度の栄えある文化財指定を、メレル・ヴォーリズさんも喜んでいらっしゃると思います。